

## 日本を救う道

教育者の皆様に捧ぐ

### 個の尊嚴の問題

一人の人間が全体を築く一個の煉瓦に過ぎなかつた全体主義の時代は、敗戦の悪夢の中に崩れて、再び人間の自由と人格の尊嚴とが社会構成の基盤とせられる時代は訪れた。それは又何よりも嬉しく有難いことであつた。今や何者の圧迫をも、生きる背後に感じない時が来た。青天の下、大きく生き得る時が来た。然しそれはほんたうの人間の解放であつたか、個の尊嚴の發揮であり得たか。

それとも猛獸群賊の、曠野への開放であつたか。いうまでもなく民族は、その恥かしい姿を世界に曝露したのである。自由は放縱とはきちがえられ、強盜窃盜賄賂横行無道義無節操等々、百鬼夜行のていたらくを出現してしまつた。背後に加わる暗黒の魔手が去つてほつと一息の時、前に群賊悪獸の大群におそわれた形である。かくして個の尊嚴は新しい課題として我等の手に渡されたのである。

### 未曾有の歴史的自覚

思うに、事変中は画一的な枠の中にはめこまれて、ある美しさを保つていたかの如くであつた。然しそれは煉瓦壁の美しさ、キューピー運動の美しさであつた。それが一度砕がはづされ、強制的な号令が無くなると、一度に野獸的本能的な力がおどり出て、一世を闇黒の中に包んでしまつたのであつた。世の識者はそれについて既に批判しつくした形である。曰く軍国主義の教育の結果、曰く他動的他律的注入教育の責任、曰く物資不足の結果、曰く無宗教の現実曝露等々、みな一往その結論の正しいことを認めざるを得ないであろう。しかしここに我等が忠実に考えて見なくてはならぬことは、はたして美しきものが醜悪なるものに一変したのであるか、それとも本来醜悪であつたものが、ただ形を変えたのであるかということである。神軍ははたして神軍であつたのか、恐るべき鬼畜であつたのか、それは今嚴かに裁かれてある。

仏説によれば、まさしく人生は無明の海であり生死の苦海である。神の国でもなければ浄土でもない。「三界無安猶如火宅」、法華經の言葉は正しい。五濁悪世の中に住むものは一生造悪の凡夫でしかない。本から穢悪の凡夫が高上りしていただけのことである。この度のことは誠にこの僥倖に対する一大鉄槌を下されたのである。それである。誠にそれである。我等民への歴史的自覚、それはかつて一度も無かつた、をうながす大否定の鉄槌である。民族の心に巣くう根強い我執我慢に対する大否定の鉄槌である。これから後起る一切の諸現象はみな、この精神的大革命、未曾有の大革命を成就せしめんがための波動にすぎない。しかしてかかる歴史的的精神的大革命の自覚は、先ず誰によつて為されねばならぬであろうか。

### 信の自覚

それは誠に教育者であらねばならぬ。聖徳太子の時代にも、大化改新にも、明治維新の時にも無かつたところの、真に未曾有の大革新は、過去の時代のように一人の英雄、一人の聖者によつて成就されるのではなくて、可なり多くの人を中心となり、そ

れがやがて国民すべてに及ぼす力となって成就されるのである。それが即ち民主的改新だと思ふ。八千万の大多数は政治によらなければならぬものであるかも知れない。即ち衣食足らざれば国民は安定しないのである。然るにその間にあつて、政治によらずして生き得る人、即ち真に道を念じて、内に自覚を成じ、この国土の苦悩を摂取し消化し得る健全なる胃腸の持主、まことに強い胃の腑の人が要る。個の人格の尊厳をいたずらに主張して他を顧みない似而非民主主義でなくて、内に真に自覚による人格の尊厳を成じて、次の世代を負ふ青少年にぶつかつてゆく真の教育者が、一人でも多く誕生することより外に、日本を救う道はあり得ないと思われる。

かくの如き自覚とは真に親鸞のいわゆる「信の自覚」である。念仏の自覚である。誠に他力廻向の大信とは、人生という大沙漠に湧くオアシスである。無限の闇を照破する如来本願の顕現であり、久遠の御いのちの泉である。一切の苦悩は、この泉に融合してはじめて、歴史的現寶、永遠の現実となり得るであろう。世間虚仮唯仏是真、虚仮を照し出すのは唯仏である。虚仮を虚仮と知つて仏の真実に帰すれば、虚仮の信知に於て仏の真実は自覚感知せられ、苦悩の深さは如来真実の無限を信知せしめる縁となるであろう。日本国土の至るところに地湧の泉が出現して来なければならぬ。そしてこの信の泉に民族の業苦の全てが受取られて来なければならぬ。かくして如来は、民族の内奥にひそむ自力我慢我執を照破し否定し回心懺悔せしめて、民族を本然の相におき、内に金剛の信を成じて個の尊厳を顕現せしめたもうであろう。